

化は起きはじめ、その変化のスピードもずつと速い。そんなことがどうしてわかるのかといえば、ヒトを含むさまざまな生物集団が集団として共有している遺伝子の変異データ(ハップマップデータなど)を詳細に突き合わせてみると、どのような生物集団がいつ頃どのように遺伝子を交換したのかという、集団の歴史が解明されてくるのだ。それを生物環境の歴史や、生活様式、生理学的変化の歴史などと組み合わせて解析をすすめていくと、化石進化学では全くわかりようもなかった驚くべき事実が次々に明るみに出てくる。

生物の歴史は遺伝子混交の歴史であり、遺伝子混交を積み重ねることで、環境変化に適應度が高くなった者だけが生き残ってきた(結果的に勝ち残った者がいる)ような遺伝子のいい所どりをしてきた)というのが進化の歴史だ。六万年前ヒトがアフリカ大陸から出て拡散をはじめた頃の人口は二五万人程度だったが、一万二千年前の氷河期が終わる頃には、六百万人に増えていた。その頃農業をはじめ、面積当たりのカロリー生産量が十倍から百倍に増え、人口も百倍くらいに増えた。人口が増えたことで遺伝子もよく混ざり合い、進化のスピードも早くなった(人口が増加すれば、より有益な遺伝子変異の出現率が上がる)。



二万年の進化爆発

農業の出現とともに、富

が蓄積されるようになり、高度な社会組織が生まれ、やがて国家が出現した。旧石器時代後期のヨーロッパと北アジアで、「ヒトの革命」あるいは「創造性の爆発」と呼ばれる急激な変化が起こった。人類文化は爆発的に進みはじめ、それが生物学的進化も加速させるという爆発的共進化現象が起きた。それはいまま進行中という。

×月×日
旧石器時代といえば、日本では、一時次々により古い旧石器が発見されて、旧石器ブームが起きた。ところが二〇〇〇年十一月、それらの旧石器の相当部分がある異常研究者の捏造であったことが判明して、大混乱が起きた。これまで発見された旧石器の何をどこまで信じたらよいかわからなくなりました。何人も有名な考古学者が、捏造石器を捏造と見抜けなかったことから、すっかり声望を落としました。一時旧石器研究は火が消えた状態になった。しかし、安藤政雄『旧石

器時代の日本列島史』(学生社 3800円+税)を読むと、この世界もようやく混乱から脱して、地に足をつけた研究がはじまっているようだ。一時は、本当に日本に旧石器時代があったかどうかさえ怪しいものだと言われていたのに、いまや、人類がアフリカから世界に広がっていったルートと、旧石器文化の流れが重ね合わせて論じられ、日本にやっていた旧石器文化の流れも、シベリア、ロシア沿海州、中国、朝鮮半島の旧石器の流れと関連づけて、東アジア黒曜石文化圏の一部とされている。日本の長野県霧ヶ峰、佐賀県腰岳、北海道白滝の旧石器三大黒曜石産地が「オプシディアン・ロード(黒曜石の道)」の重要ポイントとされている。

×月×日
映画好きの人なら誰でも知っているのが、ジェイムズ・リプトンの「アクターズ・スタジオ・インタビュー」だろう。アクターズ・スタジオは、一九四〇年代

にできたアメリカで最も有名な俳優養成機関だ。そのスタジオにアメリカの有名俳優、演出家、作家、映画監督などが次々に呼ばれ、副学長でもあるリプトンが公開で行うインタビューは、世界百二十五カ国で放送され(日本ではNHKBBS)、アメリカでは八千四百万人が見ているという超人気番組。そのインタビューは驚くほど質が高く、映画演劇研究には欠かせない資料となっている。本書『アクターズ・スタジオ・インタビュー』(早川書房 3800円+税)はその内幕を本人自身が詳しく語ったもので、きわめつきに面白いのだが、あきれれる他ないのが、この本の作り。目次もなければ索引もない(索引がなかったら資料価値はほとんどゼロ)。内容も原著が厚すぎるので訳者が大幅に削ったという。だいたいこの訳者は、九四年開始のこの番組を数回しか見たことがない由で、その価値をほとんど知らないらしい。解説らしい解説もほとんどない。

『ほくらの血となり肉となった五〇〇冊』として血にも肉にもならなかった一〇〇冊(小社刊)には、この連載の五十回分も収録されています

『私の読書日記』は、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子、鹿島茂の五氏が毎週交代で執筆いたします。

私の読書日記

H-65 突飛なるもの、進化と文明、アクターズ・スタジオ・インタビュー



ノンフィクション作家 立花隆

×月×日

ロミ『完全版』突飛なるもの歴史(平凡社 2800円+税)なる本が出た。完全版とは、一九九三年に作品社から出た『突飛なるもの歴史』が不完全だったことを意味する。ロミは『でぶ大全』『悪食大全』『おなら大全』『女性の下着の歴史』『自殺の歴史』『三面記事の歴史』『悪魔の変貌』などなど各種不思議世界を独特の視点から描いた百科全書的歴史本の著者。その博覧強記ぶりは驚異というほかない。それに次々繰り出される図録がまた驚異的。

本書も驚異の図像のオンパレードで、種村季弘の解説に従えば、「コレハ本デハナイ。慣習という良識の

抑圧を食い破って出現する精神のサーカス」なのだ。これは好事家の間ではつとに知られた不思議本だが、本書にはそれ以上に独特の価値がある。それは「訳者あとがき」と、はさみこみの「葉」21世紀の『突飛なるもの』をめぐる「にある。訳者あとがきで、はじめて著者ロミの奇怪な人物像が明かされている。これこそ二〇世紀が生んだ突飛なる人物ナンバーワンといつていいくらい変な人物。ロミは文筆家であると同時に骨董屋兼画廊「ロミ」の経営者でもある。ホテル兼居酒屋の経営者でもあり、ラジオ、テレビ番組の制作者でもあった。同時にパリにやってくる富裕なアメリカ人に「有望な無

名の新人画家」の作品と称して、自分が描いた画を高く売りつけるというあこぎな商売人でもあった。一方突飛な画像資料の膨大なコレクションでもあり、本書に取められた奇怪な画像の数々はそこから出ている。九十歳近くになってからギャングブルで全財産をすりつぶし、その膨大なコレクションを売りに出して、パリの骨董業界を驚倒させたこともある。それより驚きなのは、あの濫澤龍彦の作品の中に、ロミのこの本を下敷きにしたものが沢山あり、なかには下敷きというよりほとんど丸写しとしかいえない部分がある。幾つもあるという事実だ。

また「葉」におきめられた三浦末雄「取り扱いは注

×月×日
「人類の進化は過去一万年間に緩慢になった、あるいは停止した」と考えるのは、これまでの進化論者の標準的な考え方だった。つまり現代人も原始人もその肉体と頭脳はほぼ同じと考

が、これまでの進化論者の標準的な考え方だった。つまり現代人も原始人もその肉体と頭脳はほぼ同じと考

×月×日
従来、遺伝学者は、もっぱら化石の証拠に依拠して、目に見える形質の変化を追うことで進化理論を組み立ててきた。それに対して、著者らは、分子遺伝学、集団遺伝学のバックグラウンドから、化石には残らない遺伝子の変化に基づいて議論を組み立てていく。形質の変化が起こるずっと以前から、遺伝子の変

従来、遺伝学者は、もっぱら化石の証拠に依拠して、目に見える形質の変化を追うことで進化理論を組み立ててきた。それに対して、著者らは、分子遺伝学、集団遺伝学のバックグラウンドから、化石には残らない遺伝子の変化に基づいて議論を組み立てていく。形質の変化が起こるずっと以前から、遺伝子の変

2010.7.15 128

たちばなかし 1940年長崎県生まれ。『宇宙からの帰還』『サル学の現在』『滅びゆく国家』『ほくらの頭脳の鍛え方』(佐藤優氏との共著)ほか著書多数。

化は起きはじめ、その変化のスピードもずつと速い。そんなことがどうしてわかるのかといえ、ヒトを含むさまざまな生物集団が集団として共有している遺伝子の変異データ（ハップマップデータなど）を詳細に突き合わせてみると、どのような生物集団がいつ頃どのように遺伝子を交換し合ってきたかという、集団の遺伝子の歴史が解明されてくるのだ。それを生物環境の歴史や、生活様式、生理学的変化の歴史などと組み合わせて解析をすすめていくと、化石進化学では全くわかりようもなかった驚くべき事実が次々に明るみに出てくる。

生物の歴史は遺伝子混交の歴史であり、遺伝子混交を積み重ねることで、環境変化に適応度が高くなった者だけが生き残ってきた（結果的に勝ち残った者がいるような遺伝子のいい所どりをしていた）というのが進化の歴史だ。六万年前ヒトがアフリカ大陸から出て拡散をはじめた頃の人口は二五万人程度だったが、一万二千年前の氷河期が終わる頃には、六百万人に増えていた。その頃農業がはじまり、面積当たりのカロリー生産量が十倍から百倍に増え、人口も百倍くらいに増えた。人口が増えたことで遺伝子もよく混ざり合い、進化のスピードも早くなった（人口が増加すれば、より有益な遺伝子変異の出現率が上がる）。



二十万年の進化爆発

が蓄積されるようになり、高度な社会組織が生まれ、やがて国家が出現した。旧石器時代後期のヨーロッパと北アジアで、「ヒトの革命」と呼ばれる急激な変化が起こった。人類文化は爆発的に進みはじめ、それが生物学的進化も加速させるという爆発的共進化現象が起きた。それはいまも進行中という。

器時代の日本列島史（学生社 3800円＋税）を読むと、この世界もようやく混沌から脱して、地に足を付けた研究がはじまっているようだ。一時は、本場に日本に旧石器時代があったかどうかさえ怪しいものだとしていたのに、いまや、人類がアフリカから世界に広がっていったルートと、旧石器文化の流れが重ね合わせて論じられ、日本にやってきた旧石器文化の流れも、シベリア、ロシア沿海州、中国、朝鮮半島の旧石器の流れと関連づけて、東アジア黒曜石文化圏の一部とされている。日本の長野県霧ヶ峰、佐賀県腰岳、北海道白滝の旧石器三大黒曜石産地が「オプシディアン・ロード（黒曜石の道）」の重要ポイントとされている。

にできたアメリカで最も有名な俳優養成機関だ。そのスタジオにアメリカの有名俳優、演出家、作家、映画監督などが次々に呼ばれ、副学長でもあるリプトンが公開で行うインタビューは、世界百二十五カ国で放送され（日本ではNHKBBS）、アメリカでは八千四百万人が見ているという超人気番組。そのインタビューは驚くほど質が高く、映画演劇研究には欠かせない資料となっている。本書『アクターズ・スタジオ・インタビュー』（早川書房 3800円＋税）はその内幕を本人自身が詳しく語ったもので、きわめつきに面白い本だが、あきれ他ないのが、この本の作り。目次もなければ索引もない（索引がなかったら資料価値はほとんどゼロ）。内容も原著が厚すぎるので訳者が大幅に削ったという。だいたいこの訳者は、九四年開始のこの番組を数回しか見たことがない由で、その価値をほとんど知らないらしい。解説らしい解説もほとんどない。

『私の読書日記』は、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子、鹿島茂の五氏が毎週交代で執筆いたします。

私の読書日記

H-6 アクターズ・スタジオ・インタビュー

突飛なるもの、進化と文明、



立花隆 ノンフィクション作家

×月×日
『完全版』突飛なるもの歴史（平凡社 2800円＋税）なる本が出た。『完全版』とは、一九九三年に作品社から出た『突飛なるもの歴史』が不完全だったことを意味する。ロミは『でぶ大全』『悪食大全』『おなら大全』『女性の下着の歴史』『自殺の歴史』『三面記事の歴史』『悪魔の変貌』などなど各種不思議世界を独特の視点から描いた百科全書的歴史本の著者。その博覧強記ぶりは驚異というほかない。それに次々繰り出される図録がまた驚異的。

抑圧を食い破って出現する精神のサーカス」なのだ。これは好事家の間ではつとに知られた不思議本だが、本書にはそれ以上に独特の価値がある。それは「訳者あとがき」と、はさみこみの「葉」21世紀の『突飛なるもの』をめぐる『に』にある。訳者あとがきで、はじめて著者ロミの奇怪な人物像が明かされている。これこそ二〇世紀が生んだ突飛なる人物ナンバーワンといっていけるくらい変な人物。ロミは文筆家であると同時に骨董屋兼画廊「ロミ」の経営者でもある。ホテル兼居酒屋の経営者でもあり、ラジオ、テレビ番組の制作者でもあった。同時にパリにやってくる富裕なアメリカ人に「有望な無

名の新人画家」の作品と称して、自分が描いた画を高く売りつけるというあこぎな商売人でもあった。一方突飛な画像資料の膨大なコレクターでもあり、本書に収められた奇怪な画像の数々はそこから出ている。九十歳近くになってからギャングブルで全財産をすりつぶし、その膨大なコレクションを売りに出して、パリの骨董業界を驚倒させたこともある。それより驚きなのは、あの濹澤龍彦の作品の中にも、ロミのこの本を下敷きにしたものが沢山あり、なかには下敷きというよりほとんど丸写しとしかいえない部分がある。この事実だ。

×月×日
「人類の進化は過去一万年間に緩慢になった、あるいは停止した」と考えるのは、意作家「会田誠 食用人造少女『美味ちゃん』、鴻池朋子『動物との婚姻』増殖する『突飛なるもの』、高丘卓『ルネサンス祭壇画のUFO』などの一文は、『突飛なるもの』にとりつかれたロミ（あるいは濹澤龍彦）の後裔たちが、この日本には沢山いることを示している面白い。

が、これまでの進化論者の標準的な考え方だった。つまり現代人も原始人もその肉体と頭脳はほぼ同じと考えるわけだ。これに対して真っ向から異をとるのがグレゴリー・コクラン、ヘンリー・ハーペンディング『一万年の進化爆発』（日経BP社 2200円＋税）だ。従来の遺伝学者は、もっぱら化石の証拠に依拠して、目に見える形質の変化を追うことで進化理論を組み立ててきた。それに対し、著者らは、分子遺伝学、集団遺伝学のバックグラウンドから、化石には残らない遺伝子の変化に基づいて議論を組み立てていく。形質の変化が起こるずっと以前から、遺伝子の変

たちばなかし 1940年長崎県生まれ。『宇宙からの帰還』『サル学の現在』『滅びゆく国家』『ほくらの頭脳の鍛え方』（佐藤優氏との共著）ほか著書多数。

2010.7.15 128